

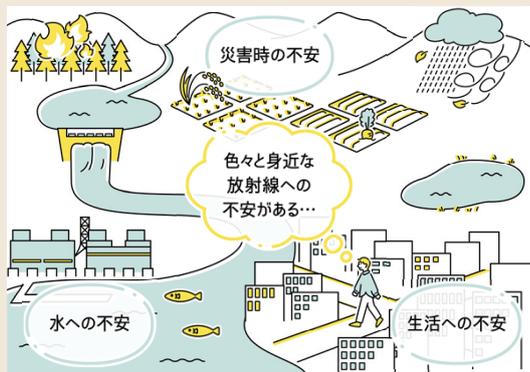
地域と歩む環境モニタリングによる 知の結集

廃炉環境国際共同研究センター環境モニタリンググループ 御園生敏治・佐久間一幸・吉村和也・舟木泰智

【背景・目的・実施内容・結果】

- ◆被災地域の復興が進む一方で、放射線に対する不安が未だ残っており、それらを解消することが復興をさらに後押しすると考えられます。
- ◆原子力機構ではそれらの不安を解消するために、長期間のモニタリングを多くの地域で実施するとともに、細かな測定データを自治体等へ提供しています。
- ◆得られた知見は、論文や報告書として発表し、それらは国際標準へ繋がっています。
- ◆さらに、QAサイトを通じて、分かりやすい情報発信に努めるとともに
- ◆今後も、放射線に関する知見を集約し、情報発信に努めるとともに、地域に根差した取り組みを通じて、様々な放射線に対する身近な不安をひとつずつ解決していきます。

住民・地域の不安に応える環境モニタリング



不安に応える環境モニタリングの実施

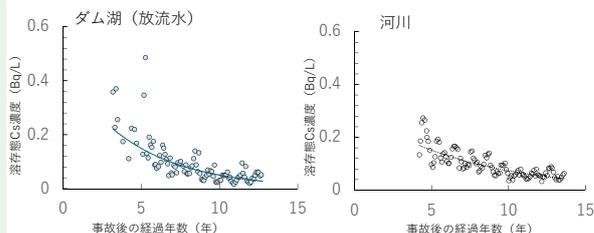


ダムや河川などの水域や市街地での環境モニタリングを実施し、環境試料を採取したり、現地での放射能濃度を測定しています。



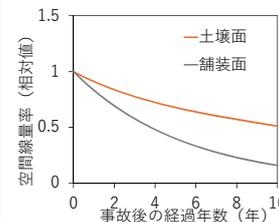
採取した試料は、実験室で処理し、放射能分析を実施しています。原子力機構では様々な不安に応えられるように測定技術や機材を準備しています。

河川水や農業用水への不安に応える



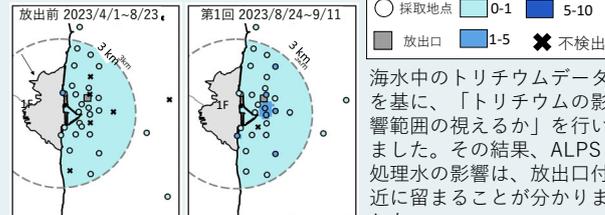
流域の多くが帰還困難区域に指定されている、大柿ダムと請戸川で長期間のモニタリングを実施しています。溶存態Cs濃度は、観測を開始した時期より大幅に低下しています。

生活環境への不安に応える



市街地に関して、土壌や舗装面等に分けて細かなモニタリングを実施しています。土壌面は事故直後の約半分、舗装面は約五分の一にまで低減しています。特に市街地は舗装面が多いため、Csの人間活動への影響は低いと考えられます。

処理水放出への不安に応える



海水中のトリチウムデータを基に、「トリチウムの影響範囲の視えるか」を行いました。その結果、ALPS処理水の影響は、放出口付近に留まることが分かりました。

身近な不安解消への協力

身近な放射線への不安を解消するために、自治体や省庁、国際機関から要請を受けて、地域の空間線量率や灌漑水中のセシウムなどの環境モニタリングを実施し、結果を報告しています。

研究成果の発信・国際標準化への貢献

論文掲載と国際レポートへの貢献



これまでに得られた知見は学術論文として発信しています。

知見を基に情報発信

MODARIA II等、国際標準への貢献



Q&Aサイトでの情報発信



疑問や不安に応えられるように、分かりやすくまとめたまとめたサイトを公開しています。誰でもアクセス可能です。

モニタリングで分かったことを基に
身近な疑問へ応えるサイト



福島総合環境情報サイト「フェイス」